調査研究

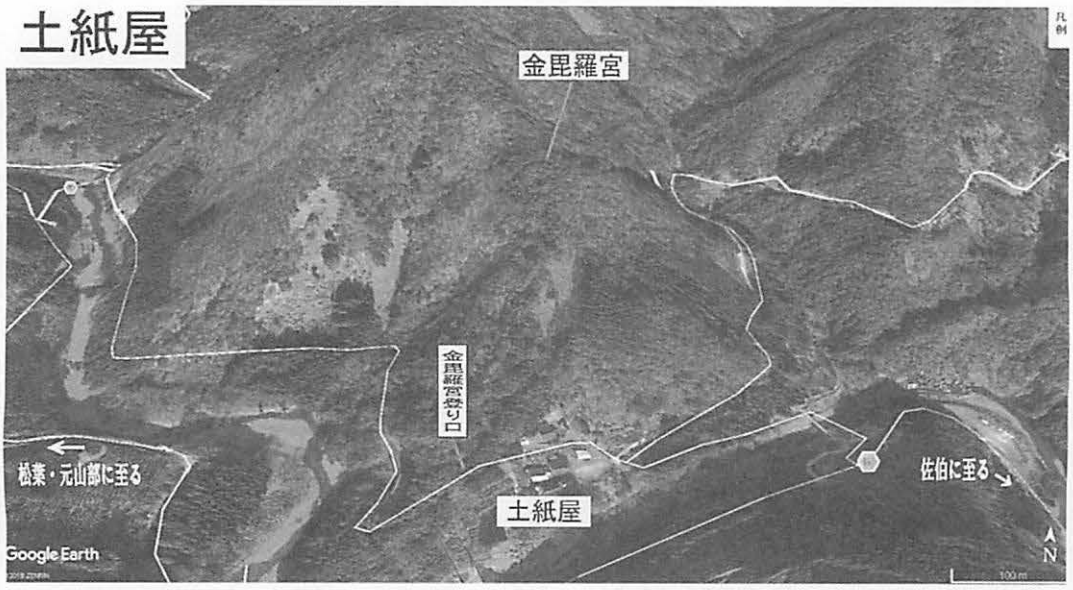
山部を歩く
土紙屋（つちごや）の金毘羅宮

仲野洋一
（会員　佐伯市弥生）

慶応元年（一八六五）
佐伯藩主　毛利高翰の領内巡視

家一軒残っていない屋形の地を経て　峠を越して山部谷に下り、土紙屋（つちごや）から谷川沿いに松葉に達し、昼食をとった後に、登尾を経て平原の建場で小憩、元山部に宿泊なさる。次の日、片内を経て樫ノ峯に到着、しばし休息の後、竹田・臼杵・佐伯三藩の境界点になっていた三国峠に登られて山野の起伏、自然の大景観をご覧なさったことと思われる。

（本匠村史　昭和五八年一〇月三〇日発行）



土紙屋の集落（無住）

慶応元年、佐伯藩主の山部村巡視は先ず、江平から屋形を経て、山を越えて土紙屋に入った。

土紙屋は険しい山と番匠川に挟まれた狭い地区で耕地が少なく、山仕事によって生計を維持していた地区だと考えていた。

だが、土紙屋地区の裏山の中腹に鎮座する「金毘羅宮」を探訪して考えを改めた。近世の土紙屋は豊かな集落だったのだ。

土紙屋から松葉に向かって林道を進むと、山側に手すりの付いた階段があり、その階段を上ると石灯籠が立っている。

石灯籠の正面に金毘羅宮、左側面に明治卅五年十月十日と刻まれ、右側面に土佐国幡多郡午細川村　北原亀太郎と刻まれている。明治の年号なので、少しがっかりしながら山を登る。藪がかぶさって道がわかりづらい。

かなり山を登ったが金毘羅宮は見当たらず、引き返そうかと思った時、前方に鳥居が見えてきた。引き返さなくて本当によかった。

石灯籠正面・左側面

石灯籠の右側面

金毘羅宮の鳥居

鳥居をくぐると、見上げるような急勾配の石段がどこまでも続いていて唖然とした。
金毘羅宮はまったく見えない。
石段の数を数えながら、息を切らして登り続ける。社殿の屋根が見えてきた。石段は凡そ三百十段あった。
（土に埋もれて分からないところがある）

金毘羅宮への石段と社殿

だが、社殿前の広場であたりを見廻してガッカリした。
石灯籠は明治期のもので、社殿も目を引くようなところ

はなかった。しかも、社殿を鳥獣除けの漁網で囲っており中の様子はわからない。あきらめて下山しようとして立ち止まった。せっかくここまで登ったのだ。山頂まで登ってみよう。何かあるかもしれない。

金毘羅宮裏手の尾根道

金毘羅宮の裏手に回ってドキッとした。

一旦下ってまた登る尾根筋には、人の踏み跡らしき痕跡が見えるではないか。これまでの経験からしてこの上にはきっと何かがある。

石の祠—この立派な祠は何だろう

尾根を六十メートルほど登ったところに、見るからに古そうな石の祠があった。引き返さないで本当に良かった。二・四メートル四方の石囲いの中に石柵に囲まれた石祠があり、祠の中に古色を帯びた石像が鎮座している。仏像でなく神像のように見える。

石囲いの中の像　神像か？

石柵の中に倒れていた一枚の石板は、石祠の左扉だった。さらにもう一枚、石板がある。

左の写真は祠の左扉だが、祠の本体から外れて倒れていた。文字が刻まれており、文化九申天　十月十日　□　□　工藤平兵衛と読める。文化九年は壬申なので申天とはどういう意味だろうか。その下の文字は判読困難である。

文字の読める祠の左扉

左の写真は、二つに折れて倒れていた石塔だが、中央に「金毘羅大権現」、左下に小さく「為村中安全」と刻まれている。

これほどの規模の金毘羅宮を造営した土紙屋に対する認識を改めなければならない。

近世の土紙屋は、三百段余の石段と、立派な金毘羅宮を造営できるだけの経済力を持っていたのだ。

また、どのようなつながりがあったかわからないが、土佐国幡多郡午細川村（？）の北原亀太郎が、山部村土紙屋の金毘羅宮に石灯籠を寄進していることに驚いた。山奥の小集落の土紙屋に、高知県につながるネットワークがあったのだろうか。

鳥居の前にある二基の石灯籠を寄進したのは、上腰越と松葉の人だろう。気になるのは金毘羅宮や石灯籠に刻まれた文字である。かなり素朴な文字なので、おそらく地元住民の手になるものだろう。

金毘羅宮の鳥居の前を右方向に一旦下った先の小高い場所に墓地の跡があり、墓石が積み重ねられていた。墓石に刻まれた文字を読むと、江戸末期から昭和初期にかけての墓石であるが、その中に「俗名　平兵衛」と刻まれている墓石があった。

釈宗徳信士位　安政五午年十一月二日

俗名　平兵衛　七十三歳

平兵衛さんの墓碑の正面と
墓碑の裏面（左）

この墓の主の平兵衛さんが亡くなった安政五年は、西暦一八五八年になる。金毘羅宮の石祠の左扉に刻まれていた工藤平兵衛さんと同一人物だろうか。金毘羅宮の左扉に刻まれた文化九年は、西暦一八一二年なので、お墓の平兵衛さんと金毘羅宮の工藤平兵衛さんが同一人物なら、文化九年には工藤平兵衛さんは二十七歳だったことになる。あるいは先代の平兵衛さんだろうか。

佐伯藩は米の反当収量を租税基礎としていたので、畑地のみで水田はほとんど持たず、まして土地生産性が低い土紙屋の租税率はかなり低かったと言える。（山部村の租税率は一割五分）。

因尾村の山間部は、製紙原料の楮、山茶、椎茸、木炭、木材など林産物の販売による現銀収入の比率が高かったことが分かっており、土紙屋も同じような状況だったと考えて間違いないだろう。

佐伯地域では、文化九年（一八一二）年正月に起こった因尾村百姓一揆の印象が強いので、山間部の百姓は貧しく生活苦にあえいでいたとの思い込みがあるが、考え直す必要があるだろう。

それにしても、土紙屋の工藤家がこれだけの規模の金毘羅宮を造営した目的はなんだろうか。はたして、金毘羅大権現への崇敬心だけでなしとげた事なのだろうか？

山部地区松葉の古老の話しによると、正月の初詣では、土紙屋の金毘羅宮に詣でていたという。

後日、土紙屋の地を離れて弥生地区に転居している工藤家現当主のS・Kさん、H・Kさんのお二人とお話しすることができた。金毘羅宮の石板に刻まれていた工藤平兵衛さんと、平兵衛さんの墓碑銘、石灯籠を寄進したと思われる高知県幡多郡の北原亀太郎さんのことを聞いたが、お二人は名前が刻まれていること自体を知らなかった。

S・Kさんは、亡くなった父親の名前は平十郎なので、平兵衛にあやかったのだろうかと言われた。

H・Kさんは、自分たちが子供の頃には旧暦の十月十日に金毘羅宮の祭礼があり、腰越からもお参りがあったという。

現在の土紙屋には誰も住んでいない。金毘羅宮も三百十段の石段も土と落ち葉に埋もれて、まもなく朽ち果てようとしている。これも時代の趨勢でやむを得ないことだろうが、地域の歴史遺産が人々から忘れ去られてしまう前に、せめて概要を記録した文書だけでも残しておくべきではないだろうか。

（追記）

令和二年一月四日、佩楯山の山頂で一人の男性に出会った。その男性は私にどこから来たのかと聞くので、佐伯からと答えると、自分は佐伯の弥生だという。面識がなかったので、お互いに自己紹介した。彼は佐伯市弥生大字山梨子のT・Kさんという林業家だった。私は自己紹介でこの数年間、山部に通って文化財を調べているが、今は土紙屋の金毘羅宮を調べているというと、T・Kさんが、土紙屋の金毘羅宮のことは知っていると言う。

そこで、高知県幡多郡の北原亀太郎という人が、金毘羅宮に石灯籠を寄進しているが、土紙屋とのつながりが分からず困っていると話した。すると驚いたことにT・Kさんは「土紙屋の工藤家の先祖は四国の出身で、土紙屋で炭焼きをしていたらしい」。続けてT・Kさん曰く、「今は弥生の山梨子に住んでいるが、小鶴（土紙屋のすぐ近く）の出身だ」。

まったく迂闊だった。工藤家の先祖が四国の出身とは考えもしなかった。高知県の幡多郡は西日本有数の木炭の生産地であり、とりわけ白炭（土佐備長炭）の産地として全国的に有名だった。

佐伯も木炭の産地として夙に有名だが土佐備長炭の製造技術を有する幡多郡の人物が、白炭の原料である樫の木（因尾村の山林には樫の木が多かった）を求めて海を渡り、山部村の土紙屋で炭を焼いているうちに土着したのだろうか。

石灯籠を寄進した幡多郡の北原亀太郎が、工藤氏の同郷または親族あるいは林業関係者なのか、確証はなにもない。

「土紙屋はその地名からして、紙すきに携わっていたのではないか。」と私が言うと、「梶（楮の原種）の栽培はしていたと思うが、紙すきは聞いたことがない。」と言われた。

T・Kさんは、小鶴での昔の生活（祖父母の時代）について話してくれたあと、山を下りて行った。その後ろ姿はまるで私の疑問に答えるために佩楯山の山頂で待っていたかのようであったが、もちろんそれは思い過ごしである。

（参考資料）

大分県の木炭生産量は昭和初年より昭和十一年頃まで、毎年二百五十～二百六十万俵を生産していたが、昭和三十一年度は三百二十万俵を生産した。白炭、黒炭の生産割合は白炭四十八％、黒炭五十二％であり、主たる樹種は、かし、くぬぎ、なら、雑木等である。

佐伯地区の木炭生産量（昭和三十一年度）

七十八万五千二百九十俵

佐伯地区の種別木炭生産量と移出量（昭和三十一年度）

白　炭　六十五万六千八百二十俵（八十四％）

黒　炭　十二万八千四百七十俵（十六％）

移出量　五十七万四千四百三十九俵

（移出割合七十三％）

本匠村の木炭生産量（昭和三十一年度）

十五万俵

因尾地区木炭生産量（昭和三十一年度）

十一万俵

（大分県の木炭　昭和三十二年十一月

大分県農林林業部林政課　より）